

研究ノート

今日の子育て不安・子育て支援を考える

～乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて

櫻谷 眞理子

A study on maternal anxiety related child-rearing and support system

SAKURADANI Mariko

There is a growing concern about maternal anxiety relating to child-rearing and childcare-related stresses. The purpose of this study is to provide appropriate help and support for mothers who suffer from such anxiety. We have investigated the anxiety of the mothers who are in the middle of raising their infants.

As a result, we have found that half of them have no confidence in being a parent. Seventy per cent of them have answered that they sometimes feel like taking out their stress on their children when they are tired and irritated. We have also learned that many of them inflict physical punishment on their children to discipline them. They have only poor childcare experience before becoming a parent and this seems to have led them to be confused with the gap between the reality of being a parent and their own images of childcare. It is also revealed that their husbands take very little care of their children and leave most of troublesome childcare and housework to their wives. The mothers are isolated from their neighbors and they bear the burden of childcare mostly by themselves with little support. Sixty per cent of the mothers have their free time only for an hour or less and ninety per cent wish to have more leisure time. Eighty per cent answered they were tired from childcare.

From all of the above, we believe that it is indispensable to take measures to reduce the mothers' burden and responsibilities and to support and help them grow up to be good parents and recover their confidence.

Key words : Child-rearing anxiety, Childcare-related stress, Infants, Mother

キーワード : 育児不安, 育児ストレス, 乳幼児, 母親

はじめに

1. 子育て不安が生じる背景

近年, 子どもを取り巻く環境の変化や遊び仲間の減少などにより, 戸外での活動体験や人と交わる経験が不足して育つ子どもが増えてい

る。また, 子どもがゆっくりと自分づくりをする姿を大人たちが見守り, 地域で支え合って子育てをすることが困難になってきている。

育児の手助けをしてくれる人の不在や近隣社会からの孤立, 親同士のつながりの希薄化は, 子育ての不安やストレスを高じさせる要因にもなっている。また, 子育て仲間との出会いが少

1) 立命館大学産業社会学部

ないということは、他の親子の姿を通じて、自分の子育てを振り返るといった機会を失うことにも結びついている。

こうした社会の変化と子育ての問題については、1970年代からすでに指摘されていたが、当時は子捨てや子殺しの問題が注目され、母性喪失や育児ノイローゼ⁽¹⁾といった視点で論争がなされていた。その後、牧野らによる育児不安に関する研究が始まり、その要因についての分析がなされようになる。

筆者も、1982年に地域調査⁽²⁾を実施し、乳幼児を家庭で養育中の母親の育児意識と生活条件について検討を加えた。その結果、近所付き合いが乏しく、子連れで行き来したり、預かり合う人がいない、夫の協力が得られない、あるいは子育て以外の楽しみや社会参加の機会が無い、母親自身が子ども時代に友だちと遊んだ経験が少ないといったことが育児不安と関連があることが見いだされた。

また、育児不安が高い母親の子どもは、自宅に閉じこもりがちで、生活リズムが乱れており、遊びの内容も貧困で、発達面においても気がかりな問題が多いことが明らかになった。なお、仕事を持つ母親よりも、専業主婦の方が育児不安が高いことがわかった。

1996年の調査⁽³⁾では、子育て家庭の孤立化がさらに進行し、育児に対する母親たちの負担感がより強まっていることが把握された。「子どもがうまく育つか不安である」、「子育てが辛い」といった不安や悩みに加え、「子どもが何故泣くのか分からない」、「子どもとどうコミュニケーションを取っていいか分からない」といった子育ての知識不足に起因する不安が生じていることがうかがえた。

地域において、学び合い、支え合う関係が衰退したことが、こうした現象を招く要因になっており、親たちの仲間づくりや育児の共同化が課題になっている。

2. 母親へ過重な責任

今日の母親たちは、主たる養育責任を負わされ、しかも、子どもがうまく育ったかどうかについても無限に責任を負わされていると永田⁽⁴⁾は指摘している。

大日向⁽⁵⁾は、今日なお社会に流布する「母性愛」や「母親役割」が女性の生き方を呪縛し、子育て中の母親を追い詰める要因になっていると指摘している。さらに、青木⁽⁶⁾は次のようなスターンの論を紹介しながら、今日の社会・文化的子育て観に潜む問題について論及している。

すなわち、「社会は、子どもが望まれて生まれ、幸せに発達することに大きな価値を置いている。そして文化は、母性の役割を高く評価しており、母親は母性の役割に従事し、感動することで、人間として高く評価される部分がある。そして、母親は子どもを愛すものであり、たとえ母親が子育ての多くを他者にまかせるとしても、全責任は母親にあるとみなされやすい」と述べているが、こうした問題はそっくりわが国にも当てはまる構図だと青木は指摘している。

要するに社会は「良好な養育環境は、母親となる女性が、すべて一人で提供できるかのような、根拠のはっきりしない幻想を持っており、社会の担うべき責任を放棄している、ないしは、気づいていないのである。母性と称する多くの役割行動や、心理的養育機能のすべてをあたかも母親固有の特性としてとらえる母性愛神話のひずみがここにも透けて見える」と、青木は論じている。

筆者の調査でも、ある母親は、「産後の体調も思わしくない中で、子どもを一人で世話することがつらく、精神的にうつ状態になってしまいました。たまに訪ねてくる夫の親には『子どもはたった一人なのに何がそんなに大変なのかわからない、もっとしっかりしなさい』と言われ、余計落ち込む毎日でした。・・・私は甘え

ているのでしょうか」と苦しい胸の内を述べている。

さらに、「こんなはずではなかった、夫は仕事に逃げられる、どうして自分だけが子育てを引き受けなければならないの・・・」といった悩みを抱えながら、でも、一人でがんばるしかないという母親たちの切実な声も数多く寄せられている。

つまり、「母親なら子どもをちゃんと育てるのは当たり前」という周囲からの圧力や評価にさらされ、ますます不安を募らせてしまう。このように、今なお「母性愛神話」が根強く残るなかで、母親たちは一人で育児を背負い込み、「良い母」を演じようとしてかえって精神的に追い詰められてしまうことがうかがわれる。

その一方では、子どもを産み育てることへの価値の変化が生じており⁽⁷⁾、母親としての生き方が揺らいでいる。また、社会に進出する女性が増え、育児と仕事を両立させている姿は、専業の母たちの迷いを増幅させ、母親役割だけで生きることへの葛藤を芽生えさせている。

こうした揺れ動く母親たちの気持ちを共感的に受け止め、「理想の子育て」「理想の母」という呪縛から母親たちが自由になり、もっとのびやかな子育てができるように支援することも必要ではなかるうか。母性愛を強調する風土を変え、母性観に対する社会的認識の歪みを是正していく取り組みも不可欠だと思われる。

以上、今日の子育てや母親を取り巻く状況について概観したが、急速な社会の変貌に伴い、親の不安やストレスは増大しており、より包括的な支援策を明らかにすることが重要な社会的課題になってきている。そこで、本研究では2003年に行った調査に基づき、育児期の母親たちの生活や育児に関する現状を把握し、今後の子育て支援の課題についてさらに検討を加えてみたい。

調査の方法

1. 対象

滋賀県内の保育園（2箇所）と京都市内の幼稚園（1箇所）を利用している母親と、京都市の住民基本台帳から無作為に抽出した0歳から5歳の乳幼児を養育中の母親を対象にした。

2. 方法

保育園、幼稚園を利用している場合は、園を通して協力を依頼、配布し、園で回収した。住民基本台帳から抽出した家庭へは郵送による配布、回収を行った。調査時期は、2003年、6月～7月である。595配布し、回収数、回収率は保育園141（70.5%）、幼稚園144（73.8%）、在宅調査60（30.0%）で有効回答数は345であった。

3. 調査内容

（1）基本的属性、（2）子育てやしつけに関する悩み、（3）子育て意識、（4）親になるまでの子育て体験、子育てのイメージと現実のギャップ、（5）父親の家事・育児への関与、妻たちの評価、（6）母親の生活、（7）子育てと仕事についての考え方など。

結果

1. 基本的属性

母親の年齢は30歳代が8割近い。20歳代が1割強、40歳代が1割弱であった。仕事を持つ母親と、在宅の母親の割合は半々である（有職47.0%、育児休業中4.9%、無職47.2%）。父親の年齢は30歳代が約7割、40歳代が約2割である。子どもの数は2人が約5割弱を占めている（1人：35.1%、2人：47.8%、3人：15.7%）。対象児の性別は女兒が男児よりやや多かった。なお、対象児の年齢は表1の通りで

ある。

2. 子育ての悩み、子どものしつけ

1) 育てにくい赤ちゃんの存在

とても手がかり、大変だったという印象を持つ母親が14.5%いることがわかった。つまり、睡眠のリズムが不規則、よく泣く、食事に問題を持つ赤ちゃんの育児に苦勞し、母親になる第一歩で大きな試練に直面する母親がいることがうかがえる。

あまり眠らない方だったという回答は18.0%、よく泣き、しかもなだめにくかったという回答は12.5%、母乳やミルクの飲み具合がよくなかったという回答は9.0%であった。

2) 子どもに関する悩み、しつけの方法

叱るときには、言葉で説明したり、言って聞かせるなど穏やかな方法が用いられていた。しかし、一方、大きな声で叱る(85.8%)、たたいて叱ることもある(55.1%)など、子どもについて感情的になったり、体罰を行うことも多い

という結果が得られた。

とくに、子どもの反抗的な態度(12.8%)、よく泣き、ぐずる(11.9%)、いつも甘えてばかりいる(11.6%)といったことで悩み、かんしゃく、駄々こね(22.3%)、指しゃぶりなどの癖(15.9%)、言うことを聞かない(14.2%)といった場面で、どうしついたらよいか困っていることがうかがえた。

3. 子育て意識、子育て環境について

1) 子育て意識

「子育てを楽しんでいる」という回答は、71.6%であった。つまり、子育てを楽しんでいる母親が7割いることがうかがえる。一方、「どちらかといえば辛い」が3.8%、「とても辛い」が1.2%であった。両方合わせて、5.0%の母親、すなわち20人に1人の母親は子育てをどちらかといえば辛く感じていることがうかがえる。

なお、表2にみられるように、「子どもにイライラしてあたりちらしたくなることがありま

表1 対象児の年齢

0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	無回答	無回答
20	64	57	54	68	64	15	9	345(人)
5.8	18.6	16.5	15.7	19.7	18.6	4.3	0.9	100.0(%)

表2 子育て意識

質問項目/回答(%)	よくある	時々ある	あまりない	全くない	無回答
子育てに疲れたと感じることは?	23.5	58.8	15.9	0.9	0.9
時間的なゆとりがほしい欲しいと思うことは?	47.8	44.1	7	0.3	0.9
育児の心配ごとや悩むことは?	14.2	58.3	25.8	1.7	0
子どもといるとイライラすることは?	9	59.4	27.8	3.5	0.3
子どもがしていることを黙って見ていられないことは?	10.1	52.5	33	3.2	1.2
子どもに十分なことをしてやれないと焦ることは?	15.7	45.8	34.5	4.1	0
子どもを育てることで自分は成長していると感じることは?	37.7	41.2	20.6	0.6	0
自分は育児にあまりむいていないと感じることは?	8.7	44.9	38.3	7.8	0.3
子どもをかわいくないとか愛せないかと思うことは?	1.2	8.1	37.1	53.3	0.3

合計サンプル数 = 345件 (100%)

すか」という質問に対しては、「よくある」と「時々ある」の回答が合計で68.4%あった。母親自身のストレスの発散がうまくなされず、その苛立ちを子どもに向けたくなくなることがうかがえる。

次に、「黙ってみていられず干渉することがある」については62.6%、「育児の心配ごとや悩みがある」については72.5%、「十分なことをしてやれない焦りを感じることもある」については61.5%の人が「よくある」、「時々ある」と答えている。なお、「子育てに疲れることがある」という人は「よくある」、「時々ある」を合わせて82.3%、同様に、「時間的ゆとりがほしい」という人は91.9%あった。

「自分は育児にあまり向いていないと感じることが」、「よくある」と「ときどきある」を合わせて53.6%という回答であった。子どもに苛立ったり、自分の子育てに不安を感じるがあったりすると、自分は育児に向いていないのではないかという悩みを抱え、親としての自信が低下する親が多いことがうかがえる。なお、専業主母の方が「育児に向いていない」と思う割合が高かった。

さらに、わが子を可愛くないとか、子どもを愛せないと思うことが「よくある」という回答は1.2%、「時々ある」という回答は8.1%であったが、この中にはより深刻な葛藤を抱えて、子育てに苦しんでいる母親も含まれていること

が懸念される。

2) 子育て環境で困っていること

表3のように、「安心して子どもを遊ばせる場所が少ない」という回答が最も多く、53.3%、次に、「子育てにお金がかかりすぎる」が48.7%、「受験やいじめなどで子育てがしにくい社会」が45.2%、「母親ひとりに子育ての負担がかかりすぎる」が28.4%、「労働時間が長すぎて子育てがしにくい」が23.8%であった。

子どもを安心して外に出せなくなっていることや大人たちに見守られて子どもたちが安心して遊べる場が少なくなっていることがうかがえた。また、働く母にとっては、保育料が高いことや労働時間が長く、また職場の理解も得られにくいことが問題となっている。病児保育の充実を要望する声も多かった。

4. 出産前の子育てのイメージと現実のギャップ

1) 子育て体験

表4のように、親になるまでに、赤ちゃんを抱いた経験のある人は67.8%、あやしったり、遊んだ経験のある人は67.2%であった。一方、ミルクや離乳食を与えた経験のある人は30.4%、オムツを替えた経験のある人は33.6%と約3割であった。自分の子どもが生まれるまでに赤ちゃんの相手をしたことが無い人は19.7%であった。子育てを体験する機会も無く、親としての

表3 子育て環境の困難さについて（複数回答）

質問項目 / 回答（件数・%）	件数	%
子育てにお金がかかりすぎる	168	48.7
育児休業がとりにくい	27	7.8
労働時間が長すぎて子育てがしにくい	82	23.8
安心して子どもを遊ばせる場所が少ない	184	53.3
いじめや受験競争などで子育てがしにくい社会だ	156	45.2
母親ひとりに子育ての負担がかかり過ぎる	98	28.4
父親の子育てに対して理解が得られにくい	30	8.7
保健所、幼稚園などの利用がしにくい	27	7.8

準備性が育ちにくい状況で子ども時代を過ごしていることがうかがえる。

2) 子育てのイメージと現実のギャップ

出産前に抱いていた子育てのイメージと現実とのギャップを感じたことのある人は52.5% (181人)と約半数いることがわかった。その理由について記述した人は132人であったが、そのうち、「思っていたより楽しい」といった肯定的内容を書いた人は16人(12.1%)に過ぎず、「夜泣きが思ったより大変」、「3時間おきのミルクが大変」、「子どもは育児書どおりのペースで成長しない」、「365日24時間子どもにかかりきりでしんどい」など子どもの実際の世話は思っていたよりも大変だということを自由記述欄に書いた人が76.5% (101人)に及んだ。

なお、「こんなに感情的になるとは思わなかった」、「子どものためと思っているが、結果的に叱ってしまい、自己嫌悪に陥る」など子どもへのネガティブな感情を持つことへの戸惑いと

悩みを書いている人もいた。このことから、出産前に子どもに抱いていた幻想と現実とのギャップを埋めて、目の前の子どもを受け入れていくことが親にとっては試練になっていることがうかがえる。

5. 父親の家事・育児への関与、妻たちの評価

1) 家事参加

表5のように、買い物やごみ捨てを行う父親は多かったが、洗濯を「全くしない」52.5%、食事作りを「全くしない」42.9%といった回答にみるように主な家事は妻まかせにしている父親が約半数いるという結果であった。なお、部屋の掃除を「全くしない」は34.2%、食器洗いを「全くしない」は28.7%という回答であった。

2) 育児参加

表6のように、子どもの遊び相手や子どもの世話をする父親は多いことが把握された。とこ

表4 出産以前の母の乳児とのかかわりについて(複数回答)

質問項目/回答(件数・%)	件数	%
抱いたことがあった	234	67.8
あやしたり、遊んだことがあった	232	67.2
ミルクをあげたり、離乳食をたべさせたりしたこと	105	30.4
オムツをかえたことがあった	116	33.6
赤ちゃんの相手をしたことはなかった	68	19.7

表5 父の家事労働について

質問項目/回答(%)	常に	時々	たまに	全くしない	無回答
食品の買い物と一緒にいく	9.9	32.2	33.3	9.6	15
食事を作る	2	11	28.7	42.9	15.3
食器洗い・食事の片付け	7.8	15.1	33	28.7	15.3
お風呂の掃除や準備をする	9.6	20.9	29.6	24.3	15.6
ゴミ捨てをする	27	16.5	18.6	22.9	15
部屋の掃除をする	4.6	17.7	28.4	34.2	15
洗濯をする	5.2	10.7	16.5	52.5	15

合計サンプル数 = 345件 (100%) 合計サンプル数 = 345件 (100%)

ろが、排泄の世話（うんち）になると、15.7%の父親は「全くしない」ということがわかった。子どもが病気のときに仕事を休んで看病したことが全く無いという回答も53.9%あり、子育てで父親が仕事を休むことが困難な職場環境であることが推察される。

なお、長時間労働により父親が子どもと関わる時間も少なくなっているようだが、子どもとの接触でストレスが生じやすい場面や面倒なことは避けている実態をみると、父親自身の意識にも問題があるといえよう。

3) 妻たちの評価

「満足している」が35.9%、「もっと協力してほしい」が25.6%、「これ以上は無理だと思う」が23.4%、「満足していない」と「とても不満である」の合計は5.3%であった。夫の家事・育児参加の現状について満足している人は約3人に1人であることがわかった。一方、これ以上は無理だとあきらめている人も多く、夫たちの家事・育児への関わりがわずかであることを受け入れざるを得ない夫婦関係であることが推察される。夫の労働条件が厳しくなっており、そのしわよせを妻たちが甘んじて受け入れているようだが、その不満が蓄積し、子どもに

向けられてしまうことが懸念される。

6. 母親の生活

1) 自由時間

平日の自由時間は約1時間、あるいはそれ以下という人が、59.2%で、大半の母親は自分のために使う時間がほとんど無いことがうかがえる。ちなみに、2時間くらいの人が25.8%、3時間以上の方は14.8%であった。時間的な余裕ができれば、「旅行、遊び、趣味を楽しみたい」という人が64.3%、「友人との付き合い」をもっとしたい人が46.1%いた。

自由記述欄では、子どもから離れて、自由に時間を過ごし、リフレッシュするために、保育園の一時保育をもっと拡充してほしいという意見を述べている人も多かった。

2) 近所付き合い

近所付き合いは、「会えば挨拶する程度」「立ち話をする程度」が合わせて54.2%と約半数を占めている。「子供同士行き来する付き合い」は28.1%と3割弱であった。「子どもを預かり合う」といった付き合いをしている人はわずか6.4%で1割にも満たないことがわかった。

なお、近所で子連れでの付き合いしている家

表6 父の育児参加について

質問項目 / 回答 (%)	常に	時々	たまに	全くしない	無回答
子どもの遊び相手をする	35.4	34.5	15.1	0	15
保育園の送り迎えをする	11.6	11	27.2	24.6	25.5
あなたの外出中に子どもの世話をする	32.5	18.6	28.4	4.3	16.2
子どもの排泄の世話をする（うんち）	16.5	24.1	28.1	15.7	15.6
子どもの排泄の世話をする（おしっこ）	17.4	29	29	8.7	15.9
子どもを風呂に入れる	28.4	37.1	17.1	2	15.3
子どもの着替えを手伝う	16.5	31.6	30.4	6.4	15
子どもに食事を食べさせる	11.3	31	32.5	9.3	15.9
子どもが病気の時に仕事を休んで看病する	1.2	11.6	17.1	53.9	16.2
子どもが泣いたりぐっすりしたときあやす	17.4	33.3	28.7	5.5	15

合計サンプル数 = 345 (100%)

が何軒あるか尋ねたところ、1～2軒という回答が45.2%、3軒以上が24.3%で、一方全く無いという回答が29.0%あった。近所に子どもを通じて付き合い合う家が全く無い人が実に3分の1近くもいることがわかった。子どもが自由にお互いの家を行き来したり、親同士が育児の手助けをし合えるような近隣関係が形成されにくい状況がうかがえる。

7. 保育形態、就労に対する考え方

1) 3歳未満の子どもの保育についての考え方
「専門家による保育」が望ましいと考えている人が28.8%、「母親が育てるが、時々保育所や児童館などで行われる保育を」と考えている人が48.7%、「自主的な子育てサークルなど」が望ましいと考えている人が3.5%、「母親が育児に専念すべき」だと考えている人は3.8%という結果であった。

3歳未満児の保育形態としては、保育園などを利用することが望ましいと考えている人は約3人に1人弱であり、一方約半数の人は家庭保育が望ましいと考えているようだが、その場合でも母親一人で世話をするのではなく、時々は集団保育の機会を得たいと思っていることが明らかになった。

2) 就労に対する考え方

現在は専業主婦の母親に、いつから就労したいか尋ねたところ、「今すぐ」5.0%、「3歳になったら」10.6%、「小学校に入学したら」24.2%、「小学校高学年になったら」9.9%、「まだわからない」16.8%で、多くの母親が仕事に復帰することを考えていることがわかった。これに対して、「働くつもりはない」と答えた人はわずか5.6%であった。このままずっと専業主婦を続けようと思っている人は少ないことがうかがえる。

考察

1. 子どもの理解、子どものしつけから見た支援の課題

「育児に関する未経験や未熟性が育児不安の最大の原因」だと、多田(1996)⁽⁸⁾は指摘しているが、今回の調査でも、同様の結果が得られた。すなわち、親になるまでに赤ちゃんの世話をした経験がある人は3割に過ぎなかった。そして、経験のある人に比べて、経験の無い人の育児不安がより高い傾向がみられた。なお、子育て経験がなかったと答えた人たちのほうが、経験があったと答えた人たちより、子どもが可愛くないと思うことがあるという回答が2倍もあった。

また、出産以前に抱いていたイメージと現実の子育てとのギャップがあったと答えた人が多かったが、イメージと現実とのギャップがあった人たちのほうが育児不安は高い傾向がみられた。こんなに泣くとは思わなかったとか、夜寝ないと思わなかったなど、想像以上に赤ちゃんの世話は大変だという記述にみられるように、未経験な育児に戸惑っていることがうかがえた。

次に、子どもの性格を親がどのように捉えているか把握してみたところ、我が強いと約半数の母親が答えており、子どもの自己主張や自我の発達を否定的に見ていることが懸念される。なお、4人に1人の子どもは、かんしゃく持ち、あるいは神経質であると母親たちは答えており、こうした理解や見方もまた子どもへの接し方にマイナスの影響を与えることが心配される。

さらに、調査の結果、子どものしつけに体罰を用いる親が多いことや、子どもがかんしゃくを起こしたり、駄々こね、言うことをきかないといった場面での対応がうまくできないことが明らかになった。子育ての手本を示してくれる

人が身近にいないために、ストレス場面で冷静に対応する術を身につけることができず、未熟なしつけへとつながっているようである。

したがって、子どもの理解やストレス対処について学ぶ機会を保障する必要があると思われる。なお、親になるまでの準備教育や赤ちゃんを養育中の母親へのサポートも大きな課題である。とくに、出産前、出産後の母親への関わりを手厚くすることが望ましい。

なお、赤ちゃんのときの印象を尋ねた中で、育てにくい特徴を持つ子どもが1割から2割存在することが示唆される結果が得られたが、チェスとトマスの研究⁽⁹⁾でも指摘されている、このような気難しく、過敏な赤ちゃんは特別なニーズを持つ子どもとして理解し、親が疲労困憊しないような支援が必要だといえよう。

2. すべての家庭に届く子育て支援と保育の保障

子育てに疲れるという回答が8割強、時間的なゆとりがほしいという回答が9割強という結果にみるように、育児の疲労感、束縛感に悩む母親が多いことが明らかとなった。なお、母親たちの自由時間はほとんど無く、専業の母でも平均2時間で、有職の母の1時間とあまり差がなかった。

「上の子の出産を機に1度退職し専業主婦になったことがあります。両方の実家からも離れており、夫は長時間労働で不在。1日中母子2人きりで精神的にとてもつらくてしんどかったです。隣の人が子どもを30分みてくれるだけでも涙が出そうなほどとてもありがたかったです。核家族で祖父母も近くにいない家庭はたくさんあるので、子どもをほんの少しの時間でもみてくれる施設があれば、専業主婦のお母さんが元気に子育てできる力強い一助になると思います」と、ある母親も述べている。

このことから、親子教室のような援助だけではなく、子どもを預かったり、ヘルパーを派遣

するなど、親に休息の時間を保証するような支援が不可欠だといえるだろう。なお、自分の手で子どもを育てたいと思っている母親も、自分だけで育てるのではなく、ときどきは専門家による保育を受けることを望んでいる。したがって、専業母の子どもにも保育の機会を保証することを考えるべきではなからうか。

2003年、8月に次世代育成支援施策の在り方に関する研究会がまとめた「社会連帯による次世代育成支援に向けて」という報告書⁽¹⁰⁾の中でも、今後の子育て支援はすべての家庭を支援し、家庭や地域社会の子育て機能の再生を社会全体で目指すものであると述べられており、子どもの一時預かりサービスの拡充や子育て中の親子が集まる「つどいの広場」を作ることが計画されている。

親たちが集まり、自主的な活動を行う拠点を地域に創りだし、子育てを共同で行う力を獲得することは望ましいことである。国としても画期的な施策を示したといえるが、予算措置が十分では無いため、先進的な地域に限定された取り組みになる恐れがある。

一方、カナダでは親と子が集まって、遊んだりできる“たまり場”が各地域につくられている。ファミリー・リソース・センター⁽¹¹⁾という名称で呼ばれており、「親の孤立を軽減する」、「親の子育て能力を高める」ことなどを目指した実に多彩な活動が行われている。もともとは親の有志の手で地域につくられたものであり、政府からの助成金を得て、運営されている。

こうした官と民の連携がわが国でも図られていくことを期待したい。地域に親と子の居場所をつくり、親たちの仲間づくりやグループ子育てを推進し、社会のみんなで子育てをする風潮を創り出していくことは社会の変革にもつながっていくと思われる。

今後さらに、保育を希望するすべての人が利用できるように保育所、幼稚園の制度改革も検

討すべきだと思われる。なお、より深刻な問題を抱え、自ら支援を求めることができない親に対しては、このような育児支援の施策だけではなく、児童福祉の専門家による支援を講じていく必要がある。

3. 父親育ちの課題

父親たちの家事、育児への参加は極めて不十分な状況であることが明らかになった。とりわけ、子どもと遊んだり、子どもの相手はするが、具体的な世話は妻まかせにする人が多いことが示唆された。

母親のうち現状に満足している人は3人に1人であり、不満だけど、がまんして自分が引き受けようとしている人が多いことが推察された。夫の長時間労働に加え、妻以上に家事育児経験の乏しい夫に対して多くを期待することをあきらめているようであった。

育児の相談相手として妻たちが求めているのは夫が一番多いという結果も得ており、夫婦で支えあって子育てをすることができない状況は母親たちの葛藤を強める要因にもなっていると推察される。父親役割を果たすことができるように、社会を変革し、夫の意識を改革することが求められていると思われる。

大日向⁽¹²⁾も「育児とは母性そのものだとして、育児の部分を女性に担わせてきた母性強調の弊害は、女性だけではなく男性にも及んでいる。日本の男性はワーカーホリックといわれ、働きすぎが今、国際社会で批判を受けている。男性たちが働きすぎといわれるまでに仕事に没頭した背景には、家事・育児は女性の母性的な領分であり、男性は家庭や育児を顧みなくてもよいとする価値観が存在していることが指摘できる」と述べている。

さらに、「父性の発達の障害は母性強調の構造のなかでもたらされてきたという点を再検討しないまま、いたずらに父親の育児参加を促す

だけでは、父親が育児に参加する意義を十分に生かすことは難しいと考えるべきである」と主張している。

父親が育児に関わることによる父親自身の成長や子どもの発達に及ぼす影響についての研究をふまえて、父親への働きかけを強めていくことが今後の課題だと思われる。

4. 母親のライフスタイルの変化と就労援助

大日向は日本的母性観が女性の生き方を縛り、社会参加や就労のための社会的体制の整備の遅れをもたらしており、育児と就労をめぐる厳しい状況に置かれていることを指摘しており、女性の生活現実が、矛盾に満ちたものになっていると論じている。

たとえば、「家事・育児に専念することを望みながらも、教育費、住宅費、老後の生活費等の補充の必要からパートタイムで働いている女性たち、その反対に働くことを望みながらも、育児と職業生活の両立が困難な状況を目の当たりにして、就労を断念したり、不安定就労に甘んじている女性たち、あるいは育児を大切にしたいという意識から育児に専念しながらも、社会から取り残される焦燥感や、教育費、老後の生活費への不安を深めざるをえない女性たちなど」⁽¹³⁾、女性たちはライフスタイルの選択に迷いや困難を抱えていることがうかがえる。

今回の調査でも、現在就労していない母親たちのうち、今すぐ働きたい人が20人に1人、3歳になったら働きたい人が10人に1人、小学校へ入学したら働きたい人が4人に1人いることがわかった。働くつもりが無い人は少なく、多くの人が将来は就労することを希望していることがわかった。

仕事か育児かという二者択一の中で専業主婦を選んだけれども、女性の一生を考えてみても、子育て後の長い人生の設計も必要になってきており、専業主婦をいつまで続けるかという悩み

を抱える人も多い。また、子どものためと思って育児に専念してみたけれども、自分には向いていないことに気づき、仕事に早く戻りたいという思いがつのっている人もいることがうかがえた。

したがって、仕事へ復帰したいという希望を持つ母親が、就職活動や職業訓練のために子どもを安心して預けられる場が必要になってきている。単なる一時預かりではなく、保育を通じて成長するわが子の姿に確信が持てるような施設が必要である。また、いつからでも職場復帰が可能になるためには、いつでも入所できる保育所の整備が不可欠であることはいうまでもない。

おわりに

2001年に国立教育政策研究所が行った調査⁽¹⁴⁾によると、「自分は親に適していないと感じることがある」と答えた人が1歳半児の親で44.4%、3歳児の親で51.7%であったことが示されている。つまり、親としての適性が無い、子育てに向いていないのではと悩み、親としての自信が持てない人が半数近くおり、しかも子どもの成長と共に、親としての自信は逆に低下するという結果が得られている。さらに、同調査では、教育への関心の高さと子育て不安は強い関連があるという結果も示されている。

今回の筆者らの調査でも、親としての自信が持てない人が半数いることがわかった。また子どもにイライラしてあたりちらしたくなることがあると7割の人が答えている。子どものしつけに体罰を用いることが多いことも把握できた。親になる以前に、子どもの世話を体験した人は3割に過ぎず、子育てのイメージと現実とのギャップに戸惑っていることがうかがえた。なお、父親たちの家事・育児参加は乏しく、手間のかかる世話は妻まかせである実態が明らか

になった。夫の家事・育児参加に満足している人は、3人に1人に過ぎず、夫婦で互いに支え合って子育てをすることができないことが母親たちの葛藤を強めていることが推察される。

また、近隣からも孤立し、不慣れな子どもの世話を母親一人で担っている在宅保育の実態も浮き彫りになった。地域における育児文化の伝承や体験の受け渡しが無い中で、不安を抱える親たちが、教育やしつけを焦り過ぎて、子どもに過干渉になっていることもうかがえた。

母親たちの自由時間は約6割が1時間、あるいはそれ以下で、時間的なゆとりが欲しいと9割の母親が思っている。また、子育てに疲れるという回答が8割もあった。

このことから、子育ての負担の軽減を図ると同時に、親の育ちを支え、自信の回復につながるような支援が不可欠になってきているといえよう。とりわけ、親たちの自主的な共同育児の場である子育てネットワークが広がるような支援が望まれる。親たちが育ち合い、学び合う関係を築くことが、閉塞的な育児状況を変革する基盤になると思われる。

注

育児不安について、学術的な定義がなされている訳ではなく、あいまいな概念として多義的に用いられている。一般的には育児への漠然とした不安や、心配事、育児の負担感、自信喪失感などを表す言葉として用いられている。なお、牧野は「無力感や疲労感あるいは育児意欲の低下などの生理現象を伴ってある期間持続している情緒の状態あるいは態度を意味している」と説明している。（牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」家政教育研究所紀要3・1982年）

筆者は、「乳幼児を養育中の母親が育児に疲れたり、子どもの発育や子育て全般にわたる心配事が絶えず、心理的緊張が増大した状態をいう」といった見方を示している。（一番ヶ瀬康子他監修『社会福祉辞典』大月書店 2002年）

引用文献

- (1) 佐々木保行編『育児ノイローゼ』有斐閣 1982年
- (2) 櫻谷真理子「家庭で育つ0歳～3歳児の生活実態と母親の育児意識調査」名古屋心理科学研究会編『心理科学の探求』第3号 1985年
- (3) 垣内国光・櫻谷真理子編『子育て支援の現在』ミネルヴァ書房2002年
- (4) 永田えり子「母親になるということ」藤崎宏子『親と子 交錯するライフコース』ミネルヴァ書房 2000年 P.83
- (5) 大日向雅美『母性の研究』川島書店 1988年
- (6) 青木紀久代「なぜ子育ては難しくなっているのか」(『児童心理』No. 745, 金子書房, 2001年). pp.12-13
- (7) 柏木恵子『子どもという価値 少子化時代の女性の心理』中公新書 2001年
- (8) 多田裕「育児不安とその対応」『総合臨床』45号, 1996年. pp.795～796
- (9) ステラ・チェス, アレクサンダー・トマス, 林雅次監訳『子どもの気質と心理的発達』星和書店 1981年
- (10) 厚労省・次世代育成支援施策の在り方に関する研究会「社会連帯による次世代育成支援に向けて」2003年
- (11) 小出まみ『地域から生まれる支えあいの子育て』ひとなる書房1999年. p.103
- (12) 大日向雅美「『母性/父性』から『育児性』へ」原ひろ子他編『母性から次世代育成力へ』新曜社 1991年. p.219
- (13) 同上. p.220
- (14) 国立教育政策研究所「早期教育研究会」編「『早期教育』に対する保護者の意識調査 2001年 (2003.12.16. 受理)」